Osaka University Knowledge Archive

Title	マフィア・暴力的腐敗・非市民性
Author(s)	河田, 潤一
Citation	阪大法学. 2003, 53(3,4), p. 55-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55084
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

マフィア・暴力的腐敗・非市民性

河田潤一

一　戦後マフィアの展開

マフィア[1]は、その起源をシチリア島西部の大土地所有制（latifundia/latifundismo）に有する。不在がちの大地主は、農地管理人（gabelloto）を雇い、農地・農園の管理をまかせ、彼らが小作人を監督して徴税などを行った。農地管理人は、私兵的な農場監視人（campiere）を配し、武力で農民を土地に繋ぎ止めた。こうした一種の武装自警団として生まれたマフィアは、跋扈する盗賊、山賊からの「保護料（u pizzu）」を地主、農民から取ったり、農園と外界の「仲介」によって、権力を蓄積する暴力的な農民企業家として農村を牛耳った。[2]ところが、大戦後の一九五〇年に農地改革法が施行されたために、彼らは差配資源である土地への統制力を失うことになる。数多くの農民も職を求めて、パレルモなど都市部へ大量に移入しだした。農村マフィアも、彼らの後を追うことを余儀なくされた。

大戦後の流動的な権力状況のなかで、マフィアは、伝統的に依存していた名望家諸集団に見切りをつけ、政治との関係、特にＤＣ（キリスト教民主党）に、より安定的な力の源泉を見出す。マフィアは、農村部では、地域開発、農地改革に関連する種々の事業体、例えば南部開発公社、ＥＲＡＳ（シチリア農地改革公社）、直接耕作者全国連

盟（Coldiretti）等にＤＣ政治家の力を借りて入り込んだ。また都市部にあっては、マフィアは、農産物・食料輸送網の支配、市場の差配のほか、一種の「公共事業省」[3]として、不動産投機、建設投機、公共事業などに利権を求めて介入したのである。

シチリアには約百、パレルモには約三〇の「一家（famiglia）」が存在していた。一家は、村、町、あるいは都市部では、通りや近隣住区を領土、縄張りとし、通常、一家「名」にはその地域名を冠した。[4]そのシチリアでは、一九五七年に、一家間の利害調整、重要事項の審議機関としての「最高幹部会（commissione）」が設置された。

戦後、パレルモ等都市部に進出したマフィアの、五〇年代中葉から六〇年代前半にかけての事業は、主として建築投機やタバコ密輸であった。その後、建築ブームは去るが、公共土木工事が新たな「メシの種」となる。一九六二年から翌年にかけて、「保護料」、「しょば代（tangente）」等の旧来的な寄生的活動や公共土木工事への食い込み、建築許可の争奪をめぐって、ラ・バルベーラ兄弟とグレコ一家（チャクッリ）が対立しだす（第一次マフィア抗争）。この抗争の結果、チャクッリで不審車に仕掛けられた爆弾のために憲兵隊員七人が死亡し、これを契機にイタリア議会は、最初の反マフィア委員会（Commissione Parlamentare Antimafia）を作り、最高幹部会は六三年にはいったん解消する。「新しいマフィア」、「企業家マフィア」[5]への変容途上での一連の出来事である。

七〇年に再建された最高幹部会は、やがて激しい内部抗争にさらされることになる。麻薬市場を動かすフレンチ・コネクションがマルセイユで七二年に閉鎖され、パレルモが米伊のみならず世界の麻薬の中継地に躍り出たからである。マフィアは、麻薬の精製・密輸取引を生業とする巨大な、ある意味で国際的な「金融マフィア」[6]へと変質し、資金源の性質上、「犯罪事業体（consorteria）」としての性格を強めていった。[7]

最高幹部会は、マフィア間における麻薬取引への「共食」権を保証するものではなく、それを構成する複数の一

家の利権と一家間序列の不一致を統制できない。一九八一年四月にステファーノ・ボンターテ（Stefano Bontate）、五月にサルヴァトーレ・インツェリッロ（Salvatore Inzerillo）らパレルモ一家の大ボスが相次いで殺害された。残酷な武闘派サルヴァトーレ・リーナ（Salvatore “Totò” Riina）を押し立てて、マフィアの利権と覇権を独占しようとするコルレオーネ一家は、パレルモ一家、一家と親密なガンビーノ一家、米伊麻薬網を牛耳るトンマーゾ・ブシェッタ（Tommaso Buscetta）らの徹底的排除に乗り出した。いわゆる第二次マフィア抗争の開始であった。一九八一年だけでも、死者は百人を超えた。パレルモ大学の刑法学者、G・テッシトーレによれば、「マフィアがテロリスト集団化しだすのは一九七八年、七九年である。この年を境にして、コルレオーネ一家が指導権を握るための戦略を根本的に変えた」[8]と述べている。

司法当局も、伝統的な「名誉ある男（uomo d’onore）」から巨大犯罪組織へのマフィアの変質という認識を共有しだす。[9]こうした認識的実践が、組織的なマフィア対策（la lotta alla mafia）を当局に迫り、そのことが逆に、対策に深く関与する判事や検事、警察幹部、政治家の容赦ない殺害にマフィアを駆り立てることになる。[10]

「第二次マフィア抗争」は、権力を奪い、保持する通常手段として、殺人と犯罪規模を組織の内外に拡大した。その結果が、司法当局、市民社会の厳しい対応を招来する。ジュゼッペ・アヤーラ（Giuseppe Ayala）元検事は、「要するにマフィアが自ら正体を暴いたのだ」[11]と言う。その意味で、一九八四年は極めて重要な年となった。故ロッコ・キンニーチ（Rocco Chinnici）パレルモ検事局予審部長（一九八三年七月殺害）の後を継いだアントニーノ・カポネット（Antonino Caponnetto）が創設したマフィア専従班は、逃亡先のブラジルから超大物ボスのトンマーゾ・ブシェッタを政府側の協力者として、八四年六月にパレルモに連れ戻すことに成功する。ブシェッタは、マフィア初の「悔悛者（pentito）」となった。ブシェッタの裏切り＝告白により、秋には五百人弱の大量逮捕が行わ

れ、八六年二月に被告四七五名（そのうち一一七人は逃亡中）のマフィア大裁判がパレルモで開かれることになった。開廷の十日後には、マフィアの「法王」として絶大な権力を欲しいままにしていたミケーレ・グレコ（Michele Greco）が逮捕され、被告席に送り込まれた。一年半に及んだ裁判は、最終的に三四四人に有罪、一一四人に無罪の判決を出し、八七年一二月に結審した。

この間もマフィア抗争は止まず、最高幹部会の実権の再奪還を狙うべく、シチリア南部のマフィアと結託したパレルモ一家が、一九八七年九月三〇日にコルレオーネ一家の殺し屋、マリオ・プレスティフィリッポ（Mario Prestifilippo）を殺害する。九〇年から九一年にかけては、一人シチリアのみならず、カラーブリア州、カンパーニア州の一部の都市で凄惨な殺し合いが目撃されるようになる（「第三次マフィア抗争」）。マフィアの攻撃目標は、組織外の判事、検事ら国家権力を直接に対象とするほど常軌を逸したものとなり、一九九二年五月にはマフィア専従班四人組の一人、ジョヴァンニ・ファルコーネ（Giovanni Falcone）検事が、また七月には故ファルコーネの後任に就任したばかりのパオロ・ボルセッリーノ（Paolo Borsellino）検事が爆殺されるに至った。十年前の九月、マフィア撲滅運動の先頭に立つ、軍特別警察のダッラ・キエーザ（Carlo Alberto Dalla Chiesa）パレルモ軍警察総監暗殺の悪夢の再来であった。

イタリア議会は、早々に厳しいマフィア対策法を通過させ、警察には令状なしで家宅捜査を行ったり、「おとり捜査」、個人の電話や会話の盗聴など、大幅な権限が付与された。同時にジュリアーノ・アマート（Giuliano Amato）内閣は、七千人余の軍隊をシチリアに送り込み、司法・警察・反マフィア政治家の保護を行った。そうした経緯のなかで、七百人を超える悔悛者を引き出し、三百人余のマフィオーソも逮捕された。

二　マフィアの暴力的腐敗

（1）「盗賊支配」

一九九三年三月二七日、パレルモ地検は、ジュリオ・アンドレオッティ（Giulio Andreotti）元首相を、一九六八年から九二年にかけてマフィアとの癒着（殺人示唆まで含む）した関係を続け、シチリアでの与党ＤＣへの投票支持と引き換えにマフィアに有利な取り計らいを行ってきたとの理由で起訴した。終身上院議員、「神なるジュリオ」とシチリア・マフィアを結ぶ鍵を握る人物が、盟友サルヴァトーレ・リーマ（Salvatore Lima）であった。一九九九年十月二三日、パレルモの裁判所は、アンドレオッティを無罪（求刑禁固十五年）との赦免判決を言い渡したが、政財界の主要人物の度を越した汚職や、マフィアとの保護や便益提供の「後ろ向きの連鎖」は、戦後イタリア政治の否定しがたい事実として、白日の下にさらされた。(12)

政治家とマフィアとの汚い関係（l'immondo connubio）は、アンドレオッティ告発の地、シチリア島パレルモにあっては、巧妙かつ露骨なものであった。公的制度の心臓部へ転移した、国家を食い物にする公金追剥的、収奪的、蓄財的な腐敗は、一般に「盗賊支配（cleptocrazia）」(13)と呼ばれる。以下に紹介する、サルヴァトーレ・リーマとヴィート・チャンチミーノ（Vito Ciancimino）こそ、パレルモを舞台に、中央ではアンドレオッティ、地元ではステファーノ・ボンターテ、シチリアの徴税業務を独占した徴税請負人、従兄弟同士の金融業者、ニーノ・サルヴォ（Nino Salvo）とイニャツィオ（Ignazio Salvo）らと癒着することによって、パレルモ市政を私物化した張本人であった。

大戦後ＤＣは、一九五四年のナポリ党大会を画期として、デ＝ガスペリ（Alcide De Gasperi）引退後、アミン

トーレ・ファンファーニ（Amintore Fanfani）書記長による自律的な近代的組織構造を有する政党の大衆化に取り組んだ。パレルモでも、ファンファーニ派の若き実力者、ジョヴァンニ・ジョイア（Giovanni Gioia）を中心に、「顧客政治、人脈政治への闘い。党と公的生活の道徳化」を目指す、政治的革新の運動が始まった。ジョイアら若き改革派は、旧来政治との訣別を目指し、歴史的地区（Centro storico）の再建と都市計画マスター・プラン（Piano regolatore comunale generale）の策定を約束した。しかし、革新政治と党改革の実際は、党・市庁府・警察・経済界・公共事業体等の権力・情実の大方の制御を通じてのジョイア派、あるいはファンファーニ派の覇権化以上のものではなかった。[14]

マフィアを父に、一九二八年にパレルモに生まれたサルヴァトーレ・リーマは、一九五六年に、若干二八歳でパレルモ市土木事業部長（Assessore ai Lavoli Pubblici）となり、公共建設部門を一手に握った。公営住宅建築プロジェクトを市の主要管掌部局の直接的統制の下に置き、建設業者に恣意的に許認可を下した。一九五八年にジョイアが下院議員に転身した後は、リーマがDCパレルモ支部を取り仕切り、前市長マウジェリ（Luciano Maugeri）病死後、手にした市長職（一九五八年五月）に六〇年地方選挙で再選出された。また、リーマ市政を、別名「チャンチミーノ王国」と呼ばしめた、同じくファンファーニ派のDC支部の幹部、コルレオーネ村出身のヴィート・チャンチミーノは、一九五九年十一月にリーマの後を襲って土木事業部長（一九五九―六四年）になった。[15]

リーマとチャンチミーノは、彼らの出自、出身地から容易に察せられるように、公共事業の発注に際し、マフィアに便宜供与を払い続けた。リーマ市長時代の四年間に約四千の建築許可が発行されたが、その九割をマフィアに関係する四人の建設会社が落札した。[16]それに対する見返りは、当然に票であったが、リーマはマフィアに自律的策略の余地を与えないほど、強力な政治マシーンを作り上げた。[17]

しかし、反マフィア委員会が総括するように、「相互に敵対し合うマフィア、実業家、官僚、専門家階級、政治家の間で広がっていった、パレルモに特有の『垂直的同盟』の重力の中心は、コーサ・ノストラにあった。このシステムは、コーサ・ノストラの雑多な派閥間で、公共事業費、反発しあう政治的な欲望・利害の平衡、力の均衡といった難事をうまく取り仕切ってきた。ショバを独り占めしようとマフィア同士が対立・競争するが、その占有の拡大あるいはコントロールが政治的な主戦場となる。コーサ・ノストラは、脅迫、殺人をもって政治的な事柄にまでしばしば介入した」[18]。マフィアは、暴力や脅しを資源に、公式的・制度的権力の中枢部に「保護」と「仲介」のネットワークを浸透させ、その私的・非合法な力を正当化しようとした。そうした「保護」と「仲介」の下、「政治家は、マフィアの庇護する企業の便益を図ろうと、市議会に対して自分たちにとって都合のよい決定を指示し、マフィア問題への不干渉の姿勢を当局に維持させ、組織の障害となる官吏や政党人の活動を封じ込めようとするのである」[19]。

しかし、反マフィア委員会の追及が厳しくなるなか、そうした「封じ込め」も限界に達し、リーマは一九六四年に市長を辞任し、チャンチミーノも公共事業部長を辞める。その後、リーマは、六八年に約八万の優先投票を集めて、国会議員に転出した。それと同時に彼は、アンドレオッティ派に鞍替し、シチリア西部出身の議員を束ねることで、同派の有力議員になっていく。他方、チャンチミーノは、六四年にパレルモ市議会議員に再選され、リーマから離れジョイア派に所属する。その後、彼は七〇年十月に一時パレルモ市長となるが、翌年十二月には市長職を投げ出し、不動産投機の世界に舞い戻った。コルレオーネ一家と親密な関係にある彼は、大型開発プロジェクト、国家やシチリア州の請負事業などを通して、権力ブロックの維持を意図するＤＣ政治家と癒着することで、「チャンチミーノ王国」を永らえさせようとした。公行政・建設業界・マフィアとの癒着関係は、一九七五年にＤＣの単

独支配が終わった後も基本的には変わらなかった。しかし、そのチャンチミーノも、一九八四年十一月にはついに逮捕、起訴されることとなるのである。

（2）暴力的腐敗

既に指摘したように、DCの戦後改革の取り組みは、南部では党員数は拡大できたものの、その実態は、庇護と恩顧を交換する「大衆クライエンテリズム政党（partito clientelare di massa）」[20]を生み落とした。「断片化した政党は、その結果、多くの政治的傾向を生み出し、それはしばしば雑多な地方ボスの私的な法廷の様相を強めた」[21]。マフィアは、私的保護の生産、促進、販売を商品とする合理的な経済アクター、事業家[22]として、こうした「私的な法廷」に介入しようとした。では、大衆クライエンテリズム政党の私的法廷とは、いかなる特徴を有するのであろうか。

まず指摘できるのが、顧客の雑多性、広範性である。J・チャブのパレルモ調査[23]によれば、①パトロネージ、特権的地位の保証によるホワイトカラー中間階級、②利益誘導、許認可、公金への接近による地元企業家、③規制緩和などによる伝統的な中間諸層（行商人、露天商も含む）、③日常的行政サービスへの与党による官僚的階級に依存する都市貧民層、と私的法廷を賑わす顧客は多様である。彼ら異質な顧客群が、DCの地方党組織の諸レベルに分離的（ディスジャンクティブ）に結合しているがゆえに、マフィアの寄生的な「仲介」の場を増やすのである。

マフィアは、「シチリアを支配しているのはわれわれだ。［DCの］連中を一掃されたくなければ、われわれの言う通りにしてもらいたい」[24]と政治家を脅迫する。P・アルラッキの推計によると、「マフィア構成員一人が、四〇人から五〇人の友人や親戚縁者の票を動かす。パレルモ県には、一千五百人から二千人のマフィアがいる。従って、

表１　シチリア西部における当選政治家へのマフィアの支持

下院選挙	ＤＣリスト掲載者でマフィアの支持を受けて当選した政治家（ａ）	ＤＣリスト掲載者で当選した政治家（ｂ）	ａ／ｂ（％）	ＤＣ以外の政党リスト掲載者でマフィアの支持を受けて当選した政治家	マフィアの支持を受けて当選した下院議員総数（ｃ）	シチリア西部から当選した下院議員総数（ｄ）	ｃ／ｄ（％）
1958	8	13	61.5	2	10	25	40.0
1963	9	12	75.0	2	11	26	42.3
1968	7	12	58.3	3	10	26	38.5
1972	7	13	53.8	2	9	26	34.6
1976	7	13	53.8	3	10	23	43.5
1979	6	13	46.1	3	9	22	40.1

出典：Pino Arlacchi, “Mafia : The Sicilian Cosa Nostra,” *South European Society & Politics*, Vol. 1, No. 1, Summer 1996, p. 92.

総数で言えば、七万五千から十万という膨大な票の束になる。この票が付き合いの深い政党や候補者に行くのである」[25]。表１は、一九五〇年代末から七〇年代末まで、シチリア西部出身の下院議員の約四〇％、ＤＣ議員の場合実に半数から四分の三がマフィアの積極的な支持を受けていることを示していて興味深い[26]。

大衆クライエンテリズム政党は、地方権力機構のコントロールと維持に最大の関心を有し、地方ボスは、右述のように、各階層対応の便益を個別主義的に配分にすることによって、その目的を実現しようとするのである。

第二の特徴は、差配する公的資源の多様性とその露骨な蚕食である。「工業化なき都市化」を余儀なくされた「宮廷都市」＝パレルモでは、民間部門には雇用機会が少なく、その分、失業率も高い。公共部門の雇用創出は南部対策の意図でもあり、同部門の雇用比率は極めて高くなり、七〇年代の雇用者数は六万人、実に労働人口の三五・六％にも上り、Ｊ・チャブによれば、その多くがＤＣの影響下にあった[27]。また、マフィアの影響も強く、「一九四三年から六三年にかけてシ

チリアで採用された公務員八八八七人のうち、九〇％はマフィアの口ききによるもので、試験に合格して職に就いたのではなかった[28]」との反マフィア委員会の報告もある。

また、こうしたいわゆる「パトロネージ」型便益以外にも、役所の許認可権、減税措置、特別融資、各種補助金、特定産業振興プログラム、特定地域開発計画などが、DCを中心とした「政党による利権山分け（lottizzazione）」の対象となっていく。マフィアは、その結節点に、「市役所だ、保健所だ、県庁だ、州庁だと入って行くことに決め[29]」、さらに、七〇年代前半以降になると、選挙で投票すべき政党に関する方針を出し始め、マフィア自身が政界に進出するようになる[30]。その結果、ジョルジョ・ボッカが憤るように、彼らは、「王者として君臨し、スーパー、ホテル、商店など、すべての主人となり、都市清掃業務までに関わ[31]」ることになる。イタリア中部、北部の汚職が、党中央組織あるいは有力政治家の私設秘書などの非合法的取引の外部の権力中枢で賄賂の共有が行われるため[32]、その「見えない」性を高めるのに対して、南部では、汚職はいわば「公然の秘密」となる[33]。

この答責性を一切欠いた「一味腐敗（clan corruption）」[34]の典型例を、デッラ・ポルタは、USL（Unità Sanitaria Locale、地域保健機構）の運用のなかに見る。USLは、一九七八年の国家法によって設置された地域の保健医療サービスの一元的提供機関である。病院、診療所の業務は、USLの指示下にあり、また医療設備、薬品の調達、医師や看護婦の人事の決定権もUSLが握っている。彼女が調査したカターニアのUSL35は、USL所長・職員、自治体、納入業者、DCなど官・民入り乱れての保健医療サービスを食い物にした一大汚職天国を作り出していた[35]。

三　非市民性

（1）「道徳以前の家族主義」

アメリカの政治学者、E・C・バンフィールドは、ルカニア県（バシリカータ州）の人口三千四百人の小村モンテグラーノ（キアロモンテの仮称）での九ヶ月（一九五四―五五年）に及ぶ参与観察に基づき、今や南イタリアの民俗誌的研究の古典とも称すべき、『後進社会の道徳的基盤』(Edward C. Banfield, *The Moral Basis of a Backward Society*, New York : The Free Press, 1958.) を著した。面接調査、課題統覚検査を通じて、彼はこの地域が、「道徳以前の家族主義（familismo amorale）」というエートス（基本的な感情・価値・信念）によって自縛された、自発的結社を知らない後進社会である、と観察した。

個人ないし家族は、物質的、目先的利益の最大化行動を他者も同様な行動をとっているという確信によって、自己の同様の行動原理を正当化しようとする。後進社会の「道徳的基盤」が「道徳以前（amorale）」であるモンテグラーノの人々は、公共問題に関心を持たず、公官吏に対する監視は住民ではなく他の公官吏の仕事と見、政治は本質的に腐敗したビジネスだと考え、結果として公的諸問題を民主的・集合的に解決する力もインセンティヴも有しないこと、即ち彼らの政治的無能さ（political incapacity）が明らかにされたのであった。

バンフィールドは、こうしたエートスの胚胎要因として、同地における高死亡率、土地保有の条件、拡大家族の欠如を指摘した。これに対して、イタリアの政治社会学者、A・ピッツォルノは、北伊に対して南部イタリアを従属的たらしめた資本主義の跛行的発展、政治・経済的周辺性、土地所有形態が、恩顧＝庇護主義的で、原子化され、不信に彩られた社会行動を生み出すと指摘した上で、当地における核家族を超えた友人関係、名付け親との関係、

拡大親族関係、顧客（他の地域では、マフィア）等、家族と社会を媒介する中間的連帯の重要性に注意を促した。[36]

人類学者のP・T・シュナイダーも、こうした準集団、非集団、同盟などを、「非コーポリット集団（non-corporate group）」と称し、シチリア西部、あるいは地中海地域における「相互に独立し、規範的志向を共有するが、集団それ自体に与えられている（広義の）財産に共通の利害を有しない人々の集団」[37]の社会的重要性に目を留めた。

封建的残滓が強く残る南部イタリアにおいて、「道徳以前の家族主義」者が、この種の中間的連帯、非コーポリット集団を通じて問題解決を図るとき、「個人的イニシアティブと権力者との個人的関係は、いかなる集合的活動よりも価値がある、とする信念」[38]に動機づけられた恩顧＝庇護主義的な関係、クライエンテリズム（clientelismo）を胚胎することになる。

このクライエンテリズムについて、L・グラツィアーノは、ナポリ型＝南部大陸型とシチリア型＝マフィア的クライエンテリズム（clientela mafiosa）とに分け、前者の手段性・道具性、後者の暴力性・収奪性と、その種差的性格を強調した。[39] ナポリでは、「政治家は、あたかも羊飼いが、自分の羊たちに対して行ってきたのと同様に、彼の選挙区民に対して物質的な利益を守る俗界の一種の精神的指導者と古くからみなされてきたし、また政府は、“buon padre di famiglia”（一族のよき父）とみなされてきた」[40]とP・A・アラムは述べている。これに対して、国家への敵対意識、法律への不信感が強い「無法と敵対」の世界シチリアにおいては、安定的なクライエンテリズムが築けず、同じ“buon padre di famiglia”も「一家のよき父」[41]として、外界から家族を保護してくれる、「抜け目ない（furbo）」[42]地方ボス、マフィオーソをその長は求めようとする。[43]

バンフィールドとほぼ同時期にサルデーニャの一小村を研究したL・ピーニャは、そこに「道徳以前の家族主義」と同型の行動様式を見出し、それを「排他的家族主義（famiglia esclusiva）」という用語で説明した。ピーニャも、

共同体関係を否定する核家族の存在と連帯の創出の困難さを指摘している。彼によれば、この「排他的家族主義」が、権力との関係でクライエンテリズムと変移主義（trasformismo）を生み出し、村政治と外界との関係の基本を形成する。[44]

「新しいマフィア」の力学構造にも、この三要素の結合を見て取ることができる。農村部から都市へ流入したマフィアは、一九五七年の最高幹部会の設置を契機として、「シチリアの地域文化の単なる反映である流動的、非団体的性格」[45]を薄めていく。「新しいマフィア」は、「構成員の生涯を越えた連続性をもち、序列的な構造を有し、入会を一定程度制限することによって戦闘性を維持」[46]しようとした。しかし、暴力と脅迫を商品としての「保護」の実行資源とする限り、集権的最高幹部会といえどもその集合的性格は極めて脆弱であり、M・クラークの説明にあるように、マフィアは、「一つの中央集権的な組織とはほど遠く、緩やかに組織された、そして運や提携の耐えざる争いや形勢の逆転にさらされた競争しあう『一家』の流動的なネットワーク」[47]であることを余儀なくされる。同様の認識をP・アルラッキは、カターニアの「悔悛者」、アントニーノ・カルデローネ（Antonino Calderone）から聞き出した。アルラッキは次のように報告している。「この鉄の掟に則った『中央集権的統一』組織は、自前の法廷、法典、憲章を備えた正真正銘の『反国家』であるはずなのに、カルデローネの話を聴いていると、それが次第にまったく別のなにかに変わっていく。分裂症と妄想のあいだでひき裂かれた宇宙とでもいうか、ひとは残らず全員にとっての敵であり味方であるような宇宙に。全員が強烈な忠誠心と誠実さを公言して憚ることなく、協約や連盟の締結と解消を繰り返しながら、その一方では偽りを認め、ペテンをはたらき、陰謀やわなを張りめぐらせ、身近な人びとを裏切ったり殺めたりする。それらすべてを支配しているのは、ホッブズの言う『絶えざる恐怖心と暴力的な死の危険』なのだ」。[48]

マフィア社会は、「一般化された互酬性（generalized reciprocity）」、あるいは「道徳資本（moral capital）」を内生・維持しうる相互規制を内部化しえないために、血縁、擬似血縁が構成員を相互に規制し合う最も強い要素となる。[49] そのような組織では、「誰かを『親友だ』と言っておきながら、裏では、その親友に裏切られたとき用の保険として、敵ともつるむ。『友人関係』、あるいは友情や忠誠心といっても、あくまで規範上の価値しか持たず、裏では実利的な、あまり褒められはしない策を弄する」。[50]

したがって、こうした「友人関係」を特徴とするマフィオーソを「一家」に繋ぎ止める最終的切り札は、組織への信頼や忠誠心ではなくて、「裏切り」に対する処罰となる。この「裏切り」コストに注目したA・アンダーソンは、マフィアの「組織構造は、掟への違反が高くつく組織と処罰を通じて、裏切りや欺きを抑制しようとする努力を映し出している」[51]と言う。「裏切り」には死の恐怖が待ち受ける、という「沈黙の掟（omertà）」こそが、共同体福祉の事業感覚が欠如するマフィオーソの行動を強く内部から統制しうるのである。F・G・フリードマンは、最低限の「相互義務」感を保証する、この「沈黙の掟」を、「敵意のピラミッド」が支配する南部イタリアの唯一の社会的協働形態であると言う。[52]「沈黙の掟」に則った、「真実のみ話す」「名誉ある男」の行動準則こそが、マフィア「内部の結束力を強め、他組織の犯罪グループと違った勢力を温存でき、百二十年間も生き延びてきた要素になって」[53]いったのである。

「名誉ある男」の権威は、「ひとびとに役立つ能力、つまりそれぞれの立場を〈調整する〉ことのできる人間、そして公的な立場に立ってひとびとにことを有利に運ぶことのできる人間としての評価に基づいていた」。[54] P・アルラッキによれば、そうした「名誉ある男」のイデオロギーは、政府から見捨てられたシチリアを自力で守るために国家の法律や公式諸制度に対抗して、権力の実際の、あるいは想定された乱用から弱者、抑圧者を守護すること

に由来する。[55]

ところが、八〇年代に入ると、この「名誉ある男」の権威は、「力」に基づくものとなる。[56]「悔悛者」ブシェッタの告発によれば、「名誉ある男」の精神的堕落は、七〇年代、麻薬とコルレオーネ一家によって始まった。[57] M・パドヴァーニは、故ファルコーネ検事の遺書となった『沈黙の掟』の日本語版序文で、コルレオーネ一家の支配は、「より残酷で、より無遠慮な、よりギャング的な、そしてシチリアの文化的土壌とのつながりや、住民の同意にはあまり気をつかわない」「新しいコーサ・ノーストラの誕生を意味する」[58]と述べている。

J・デーヴィスは、公的諸制度の制度化が未熟な社会では、「威信」が社会的階層分化の主要な編成要素になる、と言う。[59] このような「威信」と同様に、マフィアにとっては、「名誉」が、権力と富の分配の政治的道具となる。他者から「名誉」を奪う試みは、権力と富を獲得する手段となる。[60] マフィアは、そうした意味での「名誉」の争奪が、最終的には血縁、擬似血縁へと求心する、「道徳以前（amorale）」の家族主義（「血は裏切らない（il sangue non tradisce）」というシチリアの諺を想起）を内包した、「秘密の名誉ある男たちの組織」[61]となる。マフィアに「保護を要求する連中、マフィアからの保護を必要とする連中、保護を受けてしかるべき連中に、保護を提供することができる唯一の集合的制度」として、「われわれ（Noi）」＝一家[62]は、「権力あるものこそ尊敬すべきもの」[63]というシチリアの風土のなかで、常に四分五裂と、利害と打算に応じて関係を結ぶ相手をかえる、「変移主義」の変節の恐怖にさらされてきたといえよう。

（2）「悪い社会資本」

アメリカ、イギリス、メキシコ、西ドイツ、イタリア五カ国の政治文化を主として面接調査（アメリカのみ一九

六〇年、それ以外は一九五九年に実施）によって比較研究した、G・A・アーモンドとS・ヴァーバの『現代市民の政治文化』（Gabriel A. Almond and Sidney Verba, *The Civic Culture : Political Attitudes and Democracy in Five Nations*, Princeton, NJ : Princeton University Press, 1963）も、バンフィールドの主張を支持する点が多く、イタリアの政治文化を、「比較的救い難い政治的疎外、社会的孤立、不信の政治文化である」[64]と結論づけた。

イタリア南部では、E・C・バンフィールドやL・ピーニャらによると、「道徳以前」あるいは「排他的」な家族主義は自発的結社の発達を阻害し、「共同体意識」、「市民文化」の発達を導かない。アーモンドらによれば、こうした社会では市民的有力感（市民的・政治的目標達成のために他人との結合能力に基づく）、それを培養する市民的協同（外向的・対人的長所として寛容を重視する外向的性格や余暇などグループ活動に参加する傾向）も低く、政治参加も恩顧＝庇護主義的になり、実効的な民主主義を阻害する。彼らは、その逆の因果経路を、民主主義の実効化への道程と考える。

バンフィールドが、モンテグラーノとは別に当時調査していた米ユタ州セントジョージは、交際のネットワークが網の目のように張りめぐらされた、市民化した、すなわち「開明的利己心（enlightened self-interest）」に裏打ちされた多元社会である、と彼は分析した。多元的な社会（pluralistic society）は、「個人の方からみれば集団を自発的に選択参加し、集団の方からみれば集団利益を共有する個人が参入してくる。……この自発性と共有利益性を特徴とする自発的結社の多元的存在は、集団メンバーの重複を生み出し、それがバラバラな利益間に合意をもたらす結節点の役目を果たす」[65]。ここに培養される「市民文化（civic culture）」を基準に、家族水準の愛着が核家族を出ない場合、共同体＝集合水準での意識的な市民的協同よりも倫理的に劣る[66]、との価値判断（＝「道徳以前（amoral）」）が導出される。だが、こうした「非市民性（incivisme）」も、個人が心理＝合理的には「合理的」

に行動した帰結に変わりはない。行動の選択は、実行者個人が置かれた社会的・文化的文脈に規定されつつ、文脈そのものを再生産すると同時に、それによって裁可される。

利己的な個人を前提にしながら、なぜ一方は、「道徳的な」社会へ、他方は「非市民性」文化へと分岐するのか。イタリア南部には、なぜ「私的領域に一般な対構造以外に、公的関係の領域で、行動を即時的報酬ではなく、先にある報酬と一般的原則に基づいて行えるようにする集合的構造」[67]が広がらなかったのか。こうした問いかけに、バンフィールドもアーモンド＝ヴァーバも答える用意はない。

いわばこうした「経路依存（path dependency）」的な発想に支えられた制度論的な「自発的結社の科学」に、周到な調査手続きによって答えようとしたのが、R・D・パットナムの『哲学する民主主義』（Robert D. Putnam, *Making Democracy Work : Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, NJ : Princeton University Press, 1993）である。彼は、よく知られるように、民主主義の機能化を「制度パフォーマンス」と呼び、その実効性を左右する要素として「市民文化」の強度を発見した。具体的には、一九七〇年に実現した地方制度改革が生み出した各州政府の統治パフォーマンスを政策過程、政策表明、政策執行の三点で評価すべく、内閣の安定性、予算の迅速さ、統計情報サービス、改革立法、立法でのイノベーション、保育所、家庭医制度、産業政策の手段、農業支出の規模、USLの支出、住宅・都市開発、官僚の応答性という一二の指標からなる「制度パフォーマンス」指数を設定し、それと「市民文化」度を測定する「市民共同体」指数（州別の優先投票率、国民投票率、新聞講読率、スポーツ・文化団体の活性度の四指標の要約的指数）との相関性を検討した。

この作業の結果、州の統治パフォーマンスは、州政府に内属的な要因である職員安定度や統治政党の色、さらには外属的要因としての都市化や教育レベル、イデオロギー的硬直度、工業化や公衆衛生の普及といった経済的近代

化水準とほとんど関係なく、「市民共同体」度とこそ最も強く関連していることが明らかになった。自発的結社が根を張り、市民が様々な分野で活発に活動し、水平的で平等主義的な政治を旨としている地域で制度パフォーマンスは高いのである。彼によれば、北・中部イタリアには、市民的な伝統が長い歴史の間に強靭なネットワークを張り、それが政府ひいては民主主義の高いパフォーマンスを生み出すことを発見した。その逆が南イタリアである。北・中部のような地域では、互酬性の規範、相互信頼、社会的協力、市民的積極参加、よく発達した市民的義務感が緊密に絡み合い、社会の効率性を高める。こうした力をパットナムは、「社会資本（social capital）」[68]と呼んだのであった。

既に見た性格を持つバンフィールドやアーモンド＝ヴァーバらの政治文化論に対しては、その「オリエンタリズム」的性格を批判するものが多いのは当然である。パットナムは、国家交差的・地域交差的比較研究に拭い難いこの種の批判を、「市民共同体」指数など重要な指数、指標、尺度等の慎重な設定とデータ分析の統計的手法の洗練化によって克服しようとした。また、標本調査や面接調査に付き物の政治文化の静態的・本質主義的認識は、ゲーム理論と歴史分析の接合によって乗り越えようとした。そこから導き出された概念である「社会資本」は、先行する政治文化論が抽出する態度や志向よりもはるかに歴史的・関係的な行動傾性と制度的文脈をより多く含むものとなった。

個人と環境との自己強化的関係の南北対比をパットナムはゲーム理論に依拠して次のように説明している。北・中部イタリアは、野蛮状態から水平的な協力に活路を見出し、自発的な契約観念や相互信頼によって協働や市民的連帯を可能とする社会資本を形成・蓄積でき、豊かな市民共同体を享受するに至った。これに対して、イタリア南部は、搾取と隷属の支配するなか、家族と力のみに依存する垂直的・私的従属関係を発達させ、中世以来長きにわ

たって第三者執行による秩序維持を甘受してきた。マフィアは、パットナムによれば、「イタリア南部の文化と社会構造を少なくとも千年もの間特徴づけてきた水平的不信と垂直的搾取／従属のパターンにおける一つの本質的構成要素」[69]だとされた。同じく、マフィア研究の大家、ケンブリッジ大学のD・ガンベッタも、そうした不信への認知＝合理的な選択の帰結としての集合的不幸として、マフィアを捉えている[70]。

デッラ・ポルタは、そうした集合的不幸の社会を、社会資本の欠如、政府への不信、政治腐敗の相互強化的「悪循環」の帰結として捉える。ところで、パットナムは、現代アメリカにおける社会資本の衰退に言及しつつ、社会資本の公的生活への効用を論じた、一九九三年論説、“The Prosperous Community : Social Capital and Public Affairs”[71]において初めて、内集団に強い忠誠を求める、「結束的（bonding）」社会資本の問題性を認識した。公的生活にとって逆機能的な「結束的」社会資本は、封建的貴族制を欠く「自由で平等な」アメリカでは、自発的結社への出入りの階層や民族的自同性による固定化、あるいは成員の信条の内向化が生み出す非寛容性・排他性・一元性が、市民的な協働を阻害する、と認識されよう。これに対して、垂直的・私的従属関係が強い南部イタリアでは、「収賄者、贈賄者、仲介者、顧客ら非合法な行為に関わる際に随伴する危険とコストを軽減できる規範とネットワークのシステム」[73]が「悪い社会資本（bad social capital）」（デッラ・ポルタ）として認識され、政治汚職は、「そうしたインフォーマルな規範・互酬性、内々のネットワーク」[74]を養分とする、と説明される。

四　「パレルモの春」はいずこへ

「パレルモが第三世界の都市――あるフランスの旅行者が、一九世紀に、『レモンやオレンジの花でさえ死体の臭いがする』と言った町――に別れを告げ、ついに偉大なヨーロッパの一つの都市となったのは、一九九九年の六

月であった」[75]。多くの反マフィア運動家が暗殺されるなか、かつて英国チャネル4が「歩く死体」と呼んだ、反マフィア運動の闘士、「パレルモの春（La “Primavera” di Palermo）」の立役者、レオルーカ・オルランド（Leoluca Orlando）は、その自伝的著作『マフィアとの闘い』（*Fighting the Mafia and Renewing Sicilian Culture*, San Francisco: Encounter Books, 2001）をこうした文章から始めた。一九九九年六月、市民教育と自由の価値の促進を標榜する国際組織、ＣＩＶＩＴＡＳの国際会議がパレルモのマッシモ劇場を舞台に開催され、オルランド市長が運営の任に当たった。同会議には、八〇カ国以上から代表が参加し、ヒラリー・クリントンが基調講演を行ったのであった。

オルランドは、公共事業入札の透明性を図ろうとした盟友、ピエルサンティ・マッタレッラ（Piersanti Mattarella）シチリア州議会議長が暗殺された一九八〇年に、彼の遺志を継承すべく、パレルモ市議会議員選挙に出馬、初当選を果たした。反マフィア運動も八〇年代以降には、党派を超えて、法的措置を強化することを目標にする市民運動、自称「反マフィア同盟（Coordinamento antimafia）」[76]が始動し出していた。オルランドは、その後、一九八五年、八七年にパレルモ市長に当選し、そうした反マフィア運動にも後押しされて、新たな市民的公共圏の創出に取り組むと同時に、公共事業絡みの汚職を一掃すべく、入札制度の改革に乗り出した。

既に説明したように、この一九八七年は、パレルモ一家とコルレオーネ一家の壮絶な抗争の開始の年でもあった。マフィア犯罪への司法当局の取り締まりは、決定的に重要な時期を迎えていたのである。マフィア空間の制圧を目指すコルレオーネ一家は、捜査当局を脅し、その結果、警察、機動捜査隊、検事局の足並みは乱れ、八九年から九〇年初頭にかけて警察捜査のいわゆる「正常化（normalizzazione）」の動きが顕著となっていた。オルランド市長はこうした動きに抗おうとしたが、マフィアからの反発は激しく、九〇年五月のパレルモ市会議員選挙では最高

点で当選しながらも、マフィア経済の復活を強く望む政治家や経済人からの反発に会い、市議会の信任を得られず、再選は拒まれた。その結果誕生した、DC大中道派のドメニコ・ロ・ヴァスコ（Domenico Lo Vasco）市政の下で、マフィア的経済は復活したのである。

こうした経緯を経て、オルランドは政治活動の舞台を北部、全国へと移す。パレルモの反マフィア闘争に理解を示す北伊トレント市長らの協力を得て、トレント会議に参集したオルランドらは、既にイタリア全土を汚染し、政界の中枢部にまで浸透した、マフィアと政治との癒着問題を「道徳問題」と捉え、それも含めて政治の道徳的刷新に取り組む、ネットワーク状の組織を作ろうとした。左派勢力、市民活動家と協働して、ネットワーク＝「レーテ（La Rete）」をオルランドが正式に結成したのは、一九九一年三月二一日のことであった。「春（“Primavera”）」の開始を告げる三月二一日は、レーテの起源を「パレルモの春」に求めるオルランドの決意を象徴するものであった。

同年九月には、政府は、マフィア専従班のファルコーネ検事の提案（＝別々に行動している各地区の司法活動を一元化）を受け入れ、マフィア撲滅のための専従の機関、米国のFBIを模した強力な捜査機関DIA（Direzione Investigativa Antimafia——捜査陣には、憲兵、警察、財務警察を集めた財務省保護下の軍事的機関）と検察部門DNA（Direzione Nazionale Antimafia——検察総局に設置。マフィアに関する国内外の情報収集・調整機関。最低二年任期の二〇名の裁判官から構成）なる二つの組織を創設した。これらの措置が奏功してか、一九九一年から九五年までに、一七名の国会議員がマフィアとの癒着によって告訴され、その数は、シチリア州議会議員の半数以上に上った。(77)

第三次マフィア抗争の余波は、一九九二年に絶頂を迎える。五月のファルコーネ検事、七月のボルセッリーノ検

表２　パレルモ県およびシチリア全島におけるマフィア関連殺人件数
（1983–97年）

	パレルモ（a）	シチリア（b）	a／b（%）
1983	36	61	59.0
1984	17	34	50.0
1985	14	28	50.0
1986	12	59	20.3
1987	14	63	22.2
1988	34	93	36.6
1989	45	160	28.1
1990	13	150	8.7
1991	32	253	12.6
1992	28	200	14.0
1993	5	85	5.9
1994	17	90	18.9
1995	22	88	25.0
1996	10	66	15.2
1997	5	32	15.6

出典：*Elaborazione su dati Istat* (in Letizia Paoli, *Fratelli di mafia : Cosa Nostra e 'Ndrangheta'*, Bologna : Il Mulino, 2000, p. 63.)

事の爆殺については既に触れたが、三月には、例のサルヴァトーレ・リーマ上院議員が殺された。リーマ暗殺は、当時のマフィア大裁判において司法当局の保護を当てにできないことに業を煮やした、コルレオーネ一家の「野獣」、〝トト〟・リーナによる「神なるジュリオ」への警告であった。政府はやっと、十一月に「レオパルド（豹）作戦（operazione Leopardo）」と称するマフィア掃討作戦をイタリア全土で展開し出した。翌年一月には、残酷な「野獣」、サルヴァトーレが逮捕された。また、十一月には大ボスのルチアーノ・レッジョ（Luciano Leggio）が獄死し、さらに「野獣」の部下、ベネディット・サンタパオロ（Benedetto Santapaolo、九三年五月逮捕）、レオルーカ・バガレッラ（Leoluca Bagarella、九五年六月逮捕）、ジョヴァンニ・ブルスカ（Giovanni Brusca、九六年五月逮捕）らも相次いで逮捕され、コルレオーネ一家は大打撃を受け

ることになった。

表2が示すように、マフィア関連の殺人事件は、その後着実に減っていった。マフィア抗争の激化が、結果的には、市民を巻き込む反マフィア運動を醸成させ、司法当局の厳罰主義、マフィア大裁判を招来させたことが、このような結果を生み出したことは確実であろう。

マフィア、実業家、官僚、専門家階級、政治家の間の長年にわたる「垂直的同盟」は、「政界の要職を徹底的に食い物にし、商売の場を台無しにし、統治の合法性を嘲りの対象と化した」[78]。マフィアは、暴力や脅しを資源に、公式的・制度的権力の中枢部に、「抑圧」「保護」「仲介」のネットワークを浸透させ、その私的・非合法な力を正当化しようとしてきた。

ところで、くだんのオルランドは、その後九二年には下院議員に、九三年にはパレルモ市長、翌年九四年には欧州議員となった。九七年にパレルモ市長に再選された彼は、本項冒頭で紹介したように、一九九九年六月にはCIVITAS国際会議を開催し、翌年一二月にも国連多国籍組織犯罪防止大会をパレルモで開催した。

マフィアとの死闘で最後に生き残った元検事ジュゼッペ・アヤーラは言っている。「マフィアは象徴的人物だからといって、攻撃することはない。マフィアは自分の目論見の具体的障害となるものを抹殺する」[79]。欧州統合によって国境の移動を容易にしたマフィアにとっての、新たな具体的障害とはどのようなものとなるのであろうか。オルランド流の理想主義、象徴政治は、積年の「垂直的同盟」を根本から衰弱させ、「不信の地（terra infidelium）」シチリアに真の「春」をもたらすことができるのか。「神のみぞ知る」というほかはない。

（1） マフィア自身は自らの組織を「コーサ・ノストラ（Cosa Nostra）」と呼ぶ。二人の悔悛者、トンマーゾ・ブシェッ

タ（Tommaso Buscetta）とアントニーノ・カルデローネ（Antonino Calderone）の言を紹介しておこう。まず、ブシェッタの言。「マフィアという言葉は文化人の造った言葉です。私達は自分達をマフィオソと呼んでいます。これは『名誉ある男』という意味の単語です。マフィオソが組織化されたものが、『コーサ・ノストラ』と呼ばれるものです」（スティル『シチリア・マフィア』前掲訳書、八六頁）。次に、カルデローネの言。「マフィアなんて言葉はないってことは最初にはっきりさせておいたほうがいい。少なくとも仲間うちでは。マフィアは実際にはコーサ・ノストラとよばれる。事実わたしたちはマフィアなんて言葉は口にしない。コーサ・ノストラは秘密の名誉ある男たちの組織だ」（アルラッキ『名誉を汚した男たち』前掲訳書、一四頁）。

マフィアの起源や変遷、用語法に関しては、北村暁夫、竹内啓一、竹山博英、藤澤房俊らの優れた著作、翻訳（訳者解説も含む）に譲りたい。彼らの代表的研究のみ、以下に記す。Salvatore Lupo, *Storia della mafia dalle origini ai giorni nostri*, Roma : Donzelli, 1993. 北村暁夫訳『マフィアの歴史』（白水社、一九九七年）、竹内啓一「マーフィアと都市」『一橋論叢』九七巻六号、一九八七年六月、七四三―七六六頁、同「マーフィアと都市」『地域問題の形成と展開』（大明堂、一九九八年）XI章、竹山博英『シチリア――神々とマフィアの島』（朝日新聞社、一九八五年）、同『マフィア――シチリアの名誉ある社会』（朝日新聞社、一九八八年）、同『マフィア――その神話と現実』（講談社、一九九一年）、同『マフィア戦争――ナポリ・カラブリア・シチリアをゆく』（集英社、一九九一年）、Leonardo Sciascia, *Il giorno della civetta*, Milano : Einaudi, 1961. 竹山博英訳『真昼のふくろう』（朝日新聞社、一九八七年）、Giuseppe Ayala con Felice Cavallaro, *La guerra dei giusti : I giudici, la mafia, la politica*, Milano : Mondadori, 1993. 同訳『マフィアとの死闘――生き残った検事の手記』（日本放送出版協会、二〇〇〇年）、藤澤房俊『シチリア・マフィアの世界』（中央公論社、一九八八年）。本稿は、これら諸研究に多くを負っている。また、以下の翻訳も、右の一部と同様に日本語訳の引用などの点で多くを負っている。訳者に深謝するものである。Norman Lewis, *The Honoured Society*, London : William Colin & Sons, 1964. 大庭忠男訳『マフィアの誕生――掟と復讐』（早川書房、一九七二年）、Fabrizio Calvi, *La vie quotidienne de la mafia de 1950 a nos jours*, Paris : Hachette, 1986. 小林修訳『マフィアの帝国』（ＪＩＣＣ出版局、一九九一年）、Giovanni Falcone e Marcelle Padovani, *Cose di Cosa Nostra*, Milano : Rizzoli, 1991. 千種堅訳『沈黙の掟』（文芸春秋、一九九三年）、Pino Arlacchi, *Gli uomini del disonore : La mafia siciliana nella vita del grande pentito*

Antonino Calderone, Milano : Mondadori, 1992. 和田忠彦訳『名誉を汚した男たち』(新潮社、二〇〇〇年)、Giorgio Bocca, *L'inferno*, Milano : Mondadori, 1992. 千種堅訳『地獄――それでも私はイタリアを愛する』(三田出版会、一九九三年)、Pino Arlacchi, *Addio Cosa Nostra, : La vita di Tommaso Buscetta*, Milano : Rizzoli, 1994. 大辻康子訳『さらばコーザ・ノストラ』(学習研究社、一九九五年)、John Follain, *A Dishonoured Society : The Sicilian Mafia's Threat to Europe*, London : Time Warner Books, 1995.福田靖訳『すべてはマフィアの名のもとに』(三田出版会、一九九六年)、Alexander Stille, *Excellent Cadavers : The Mafia and the Death of the First Italian Republic*, London : Jonathan Cape, 1995. 松浦秀明訳『シチリア・マフィア――華麗なる殺人』(毎日新聞社、一九九九年)。本国イタリアにおけるマフィアに関する文献は、汗牛充棟の観がある。最近刊の戦後マフィア通史としては、Alfio Caruso, *Da cosa nasche cosa : Storia della mafia dal 1943 a oggi*, Milano : Longanesi & C., 2000 が詳しい。巻末年譜も詳細。本稿の年月日の確認は同年譜によった。また、Leone Zingales, *Vecchia e nuova mafia*, 2 Vols, Caltanissetta : Terzo Millennio, 2001, 2002 は、「マフィア人物年鑑」として新旧網羅的で便利。

(2) Cf., Michele Pantaleone, *Mafia e politica*, Torino : Einaudi, 1962, capitolo I, II ; Anton Blok, "Peasants, Patrons, and Brokers in Western Sicily," *Anthropological Quarterly*, Vol.42. No.3, July 1969, pp.155-170 ; Henner Hess, *Mafia and Mafiosi : The Structure of Power*, Westmead : Saxon House, 1973, pp.143-145 ; Anton Blok, *The Mafia of a Sicilian Village, 1860-1960 : A Study of Violent Peasant Entrepreneurs*, New York : Harper & Row, 1974, pp.22-26 ; Pino Arlacchi, *Mafia, Peasants and Great Estates : Society in Traditional Calabria*, Cambridge : Cambridge University Press, 1983, pp.111-120. オランダの人類学者、A・ブロックによれば、シチリアの大土地所有制の特徴は、以下五点にある。①粗放農牧経済の土台、②岳上集落の重要性と農民の非定住、道路網の未整備、③恒常的な社会不安、④羊飼いと農民の遊牧民的性格、⑤不在地主、農民の不安定な雇用状況、農業からの女子の排除を原因とする人間と土地の不安定な関係。こうした環境で、農地管理人が農場監視人の剥き出しの暴力を資源に、農地と外界の「仲介」を利用して、私益を貪ることが可能となる。彼ら「暴力的な農民企業家」こそが、マフィアの起源であり、伝統的な農村マフィアである(Blok, *The Mafia of a Sicilian Village, op. cit.*, p.7 & p.54.)。

(3) フォレイン『すべてはマフィアの名のもとに』前掲訳書、一一四頁。

（4） Cf., Anton Blok, *Honour and Violence*, Cambridge : Polity Press, 2001, p.273.

（5） Pino Arlacchi, “The ‘Mafioso’ : From Man of Honour to Entrepreneur,” *New Left Review*, No.118, Nov.-Dec. 1979, pp.53-72 ; Pino Arlacchi, *Mafia Business : The Mafia Ethic and the Spirit of Capitalism*, Oxford : Oxford University Press, 1988, Part III. P・アルラッキによれば、マフィア的企業の競争上の利点は、以下の三点にある。①暴力や縁故関係による保護の傘で、経済活動の諸部門や原料・商品の地方的独占、②違法まがいの雇用（時間外手当の不払い、社会保障費の企業負担分の未払い）による人件費の抑制、③違法活動による蓄積と金融業者との癒着による、通常の中小企業に比しての資金調達の容易さ（Arlacchi, *Mafia Business*, *ibid*., pp.89-105.）。

（6） Judith Chubb, “From the Entrepreneurial to the Financial Mafia,” in Judith Chubb, *The Mafia and Politics : The Italian State under Siege*, Western Societies Program Occasional Paper No.23, Ithaca, NY : Center for International Studies, Cornell University, 1989, pp.33-45.

（7） Cf., Salvatore Lupo, “The Mafia,” in Patrick McCarthy(ed.), *Italy since 1945*, Oxford : Oxford University Press, 2000, pp.158-160 ; Francesco Barresi, *Mafia ed economia criminale*, Roma : Edizioni dell’Università Popolare, 1999. マフィアは、「合法的」企業を通じて洗浄した資金を麻薬取引等、非合法活動に再投資する（Vittorfranco S. Pisano, *The Dynamics of Subversion and Violence in Contemporary Italy*, Stanford, CA : Hoover Institution Press,1987, p.85.）。V・S・ピサーノによれば、そうした非合法活動の背後に、マフィア特有の「犯罪精神（mentalità mafiosa）」が潜むと言う。それは、以下からなる。①確信的犯意、②犯罪の放免への期待、③縁故・情実主義、④権力者からの保護の獲得への確信が生む安全感覚（Pisano, *ibid*., p.82.）。

（8） Giovanni Tessitore, *Il nome e la cosa : Quando la mafia non si chiamava mafia*, Milano : Franco Angeli, 1997, pp.263-264.

（9） Raimondo Catanzaro, “The Mafia,” in Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti(eds.), *Italian Politics : A Review*, Vol.1, London : Frances Pinter, 1986, p.88.

（10） ジュゼッペ・アヤーラ元検事は、「誤って『名誉ある社会』と呼ばれてきた犯罪組織は、いくつかの原則を作っていた。それは、検事や警官を殺すな、女や子供を殺すな、『嵐が過ぎるまで頭を伏せていろ』といったものだった。しか

表３　シチリアにおける新規住宅建築件数（1954–73年）

年	件数	年	件数	年	件数
1954	8,590	1961	18,059	1968	14,505
1955	10,778	1962	19,602	1969	16,429
1956	14,793	1963	22,949	1970	20,014
1957	17,290	1964	26,446	1971	15,416
1958	15,933	1965	18,780	1972	12,468
1959	16,315	1966	14,888	1973	9,436
1960	17,719	1967	14,845		

出典：*ISTAT : Annuario statistico dell'attività edilizia e delle opere pubbliche, Vol.I-XIX*, 1955-74 (in René Seindal, *Mafia : Money and Politics in Sicily, 1950-1997*, Copenhagen : Museum Tusculanum Press, 1998, p.79.）

し麻薬取引とともに、わずかの間にすべての規則、習慣を捨て去り、カネにまみれ、傲岸で、暴力的で、残忍な顔を前面に出したマフィアがのさばってきた。そしてすべてのものが殺人の対象となった。検事、政治家、警察官、憲兵隊員、女、子供、みな例外ではなかった」（アヤーラ『マフィアとの死闘』前掲訳書、一五二頁）と報告している。

（11）アヤーラ、前掲訳書、一五三頁。

（12）Cf., Percy Allum, "Statesman or Godfather?: The Andreotti Trials," in Roberto D'Alimonte and David Nelken(eds.), *Italian Politics : The Center-Left in Power*, Boulder, CO : Westview Press, 1997, Chapter 12. その後、アンドレオッティは、殺人共謀の罪で禁固二四年の判決を受けるが、二〇〇三年十月三〇日、最高裁（破棄院）は、元首相の殺人依頼について「事実無根」と認定し、逆転無罪の判決を言い渡した。

（13）Cf., Donatella della Porta e Alberto Vannucci, "Cleptocrazia," in *Enciclopedia delle Scienze sociali*, Vol.IX, Roma : Istituto della Enciclopedia Treccani,2001, pp.32-41. 拙訳「盗賊支配」『阪大法学』五三巻二号、二〇〇三年八月、二〇一–二三〇頁。「盗賊支配(cleptocrazia)」は、「国家財政の独り占め（proprietary public finance)」とも言われ、国家の徴税・支出政策の目的が、「支配階級あるいは政治的体制側と妥協する集団に最大のレントを引き出す」（Herschel I. Grossman, "Rival Kleptocrats : The Mafia versus the State," in Gianluca Fiorentini and Sam Peltzman(eds.), *The Economics of Organised Crime*, Cambridge : Cambridge University Press, 1995, p.143.）というように特徴がある。

（14） Judith Chubb, *Patronage, Power, and Poverty in Southern Italy*, Cambridge : Cambridge University Press, 1982, pp.63-71.

（15） 表3は、一九五四年から七三年までのシチリア全島における住宅建築件数の推移を示している。全件数の約三分の一がパレルモ県（「都心部に限定されない」）の分である。建築ラッシュが、「チャンチミーノ王国」（Cf., Chubb, *Patronage,Power, and Poverty, ibid*., p.145. Cf., Rosaria Schifani e Felice Cavallaro, *Oltre il buio : Dopo Capaci,via D'Amelio e gli orrori di Cosa Nostra*, Catanzaro : Rubbettiono Editore, 2002, pp.47-48.）時代であることが分かる。

（16） 「そのうち三千四百件が四人の人たち、一人は石炭商人、もう一人は門番、三番目は大工、最後がビル建築の作業員に許可が与えられた。もちろん四人ともマフィアの首領の単なる代理人であった。マフィアの首領の大部分はすでに麻薬取引で財をなし、麻薬取引は現代生活が麻薬の助けを極度に必要としたため、ますますもうけになる商売となった」（Peter Nichols, *Italia, Italia*, Boston : Little, Brown & Company, 1973, pp.302-303. 石井伸一・板倉健次訳『イタリアの解剖』サイマル出版会、一九七八年、二五三頁。Cf., Sandro Provvisionato, *Segreti di mafia*, Roma-Bari : Laterza, 1994, p.201.）

（17） Pino Arlacchi,"Mafia : The Sicilian Cosa Nostra," *South European Society & Politics*, Vol.1, No.1, 1996, p.91.

（18） Commissione Parlamentare Antimafia, *Relazioni della XI legislatura* (9 marzo 1993-18 febbraio 1994) Camera dei Deputati, Roma, 1995, p.59., cited in Alison Jamieson, *The Antimafia : Italy's Fight against Organized Crime*, London : The Macmillan Press, 2000, p.55.

（19） Alberto Vannucci, "Politicians and Godfathers : Mafia and Political Corruption in Italy," in Donatella della Porta and Yves Mény(eds.), *Democracy and Corruption in Europe*, London : Pinter, 1997, p.60.

（20） Cf., Mario Caciagli, *Democrazia cristiana e potere nel Mezzogiorno : Il sistema democristiano a Catania*, Firenze : Guaraldi, 1977, capitolo 4 ; Mario Caciagli and Liborio Mattina, "The Mass Clientelism Party : The Christian Democratic Party in Catania and in the Southern Italy," *European Journal of Political Research*, Vol.7, 1979, pp.253-275 ; Mario Caciagli, "The Mass Clientelism Party and Conservative Politics : Christian Democracy in Southern Italy," in Zig Layton-Henry(ed.), *Conservative Politics in Western Europe*, London : The Macmillan Press,

1982, pp.264-291.

(21) Donatella della Porta, "The Vicious Circles of Corruption in Italy," in della Porta and Mény(eds.), *Democracy and Corruption, op. cit.*, p.47.

(22) Diego Gambetta, "Mafia : the Price of Distrust," in Diego Gambetta(ed.), *Trust : Making and Breaking Cooperative Relations*, New York : Basil Blackwell, 1988, Chapter 10 ; Diego Gambetta, *The Sicilian Mafia : The Business of Private Protection*, Cambridge, MA : Harvard University Press, 1993.

(23) Chubb, *Patronage, Power, and Poverty, op. cit.* Chapters 4,5, & 7.

(24) フォレイン『すべてはマフィアの名のもとに』前掲訳書、一九三頁。

(25) アルラッキ『名誉を汚した男たち』前掲訳書、二二六頁（訳文は変更）。J・フォレインは、その集票の手口を次のように報告している。「マフィアは選挙を巧みに操作して、市町村議会だけでなく、県議会、州議会、さらには国会の議席配分までも支配していた。一九九二年四月の総選挙で新しい制度が導入されるまで、人びとは投票用紙にコーサ・ノストラが選んだ候補者を順番に記入し、こまかい指示にも従うよう命じられていた。その後に導入された比例代表制では、一つの党から最高四人までの候補者を選び、それに優先順位をつけることになっていた。シチリアの多くの地域では、コーサ・ノストラがその順番まで指示し、投票者がその命令に従うよう、投票後に投票用紙を調べていた。……公開の場で行われる集計作業には、ファミリーからスパイが送り込まれ、指示に従わなかったものがいれば、それが誰かを割り出した。……一九九一年、カターニアでは地方選挙を前にして、ファミリーの指示に従うかわりに、数々の見返りが有権者に贈られた。金、灯油の引き換え券、劇場のチケット、食料品の包みまであった。包みのなかには、パスタが五キロ、オリーブ油二リットル、五〇〇〇リラ紙幣、そして『投票についてのアドバイス』が入っていた」（フォレイン『すべてはマフィアの名のもとに』前掲訳書、二〇八―二〇九頁）。彼ら「マフィアは、仲介役としての伝統的な役割を果たしながら、こちらが言う候補者に投票してくれれば何かお返し――おそらくは仕事の斡旋――をしようと言い、その約束はかならず実行すると保証する」（フォレイン、前掲訳書、二〇九頁）。

(26) もちろん、S・ルーポも言うように、マフィアの集票力を過大評価するには注意が必要なことも確かである。ルーポは、DCからPSIへのマフィアの選挙支持の変更にもかかわらず、選挙地図に大きな変化が現れなかった点に注目

し、ＤＣの勝利は、「マフィアの支持ではなく、党の集合的な神話・プロジェクト・理念」によるものであるとして、マフィアの政治的役割の限界を強調している（Lupo, “The Mafia,” *op.cit.*, p.169）。

（27） Chubb, *Patronage, Power, and Poverty*, *op. cit.*, p.89.

（28） フォレイン『すべてはマフィアの名のもとに』前掲訳書、二〇九頁。

（29） ボッカ『地獄』前掲訳書、一三九頁。

（30） アルラッキ『名誉を汚した男たち』前掲訳書、二二四−二二七頁。

（31） ボッカ『地獄』前掲訳書、五九頁。

（32） Vannucci, “Politicians and Godfathers,” *op. cit.*, p.63.

（33） Jonathan Hopkin and Alfio Mastropaolo, “From Patronage to Clientelism : Comparing the Italian and Spanish Experiences,” in Simona Piattoni(ed.), *Clientelism, Interests, and Democratic Representation*, Cambridge : Cambridge University Press, 2001, p.160. 全国レベルでも、一九八〇年代のＤＣ、ＰＳＩを中心とする五党連立政権、あるいはクラクシ（Bettino Craxi）、アンドレオッティ、フォルラーニ（Arnoldo Forlani）のＣＡＦ体制とも呼ばれるＤＣ—ＰＳＩ軸は、「クライエンテリズムを露骨な汚職へと悪化させた」と評されるように、票と利益の媒介に勤しむ「ビジネス政治家」（Cf., Alessandro Pizzorno, “La corruzione nel sistema politico,” in Donatella della Porta, *Lo scambio occulto : Casi di corruzione politica in Italia*, Bologna : Il Mulino, pp.23-24 ; Donatella della Porta and Alessandro Pizzorno, “The Business Politicians : Reflections from a Study of Political Corruption,” in Michael Levi and David Nelken(eds.), *The Corruption of Politics and the Politics of Corruption*, Oxford : Blackwell Publishers, 1996, pp.73-94. ; Donatella della Porta and Alberto Vannucci, *Corrupt Exchanges : Actors, Resources, and Mechanism of Political Corruption*, New York : Aldine de Gruyter, 1999, Chapter 3.）の急速な台頭を許し、利権政党の全国化をいっそう推し進めた（Piero Ignazi, *Il potere dei partiti : La politica in Italia dagli anni Sessanta a oggi*, Roma-Bari : Eidtori Laterza, 2002, pp.92-108）。

（34） Donatella della Porta and Alberto Vannucci, “The Governance Mechanisms of Corrupt Transactions,” paper presented to the second joint meeting of Comparative Studies of Political Corruption and Clientelism , Kobe, Japan,

September 27-28, 2003, pp.15-18.

(35) della Porta, *Lo scambio occulto, op. cit.*, pp.118-121 & 154-162. 竹山博英が観察したＵＳＬ27（タウリアノーヴァ）も同様であった。竹山は、次のように報告している。「ＵＳＬの所長になることは大きな権力を握ることを意味する。チッチョ・マクリが所長だったＵＳＬ27は、タウリアノーヴァ周辺の十の市町村の住民約四万八千人を対象に、年間五百億リラ（約五十五億円）の予算を割りあてられていた。マクリはこれを好き勝手に使っていたのだ。彼は病院や救急診療所には予算を使わなかった。そのため病室は汚れ放題で、しらみが大量発生したため、閉鎖を余儀なくされた病室も出てきた。彼は偽の薬を大量に買い、その代金の一部を『しょば代』として払わせていた。たとえばマラリア用血清と称した『ステミナル』の中身は汚水だった。また消毒の中身も水だった。さらには病気を治療したと偽って、多額の保健金を請求したり、七億リラの小切手を着服したり、愛人をＵＳＬの従業員にしたりした」（竹山『マフィア戦争』前掲書、一八八−一八九頁）。ＤＣ、マフィア、マクリ所長（一九八九年二月、公金横領再で懲役四年四ヶ月の求刑。ＵＳＬ所長職解任）がグルになったＵＳＬ腐敗は、デッラ・ポルタらが言う「一味汚職」の極限を示している。

(36) Alessandro Pizzorno, “Amoral Familism and Historical Marginality,” *International Review of Community Development*, Vol.15, 1966, pp.55-66.

(37) Peter T. Schneider, “Coalition Formation and Colonialism in Western Sicily,” *Archives européennes de sociologie*, Vol.13, 1972, p.256. これに対して、コーポリット集団は、①法的地位（公認されていること）、②集団それ自体に帰属する共同財産のコントロール、③集団に固有の組織的永続性、④成員の補充における永続性を特徴とする（Peter Schneider, Jane Schneider and Edward Hansen, “Modernization and Development : The Role of Regional Elites and Noncorporate Groups in the European Mediterranean,” *Comparative Studies in Society and History*, Vol.14, 1972, p.334.）。Cf., Jane Schneider, “Family Patrimonies and Economic Behavior in Sicily,” *Anthropological Quarterly*, Vol.42, 1969, pp.109-129.

(38) Caciagli, “The Mass Clientelism Party and Conservative Politics,” *op. cit.*, p.273.

(39) Luigi Graziano, “Patron-Client Relationships in Southern Italy,” *European Journal of Political Research*, Vol.1, No.1, April 1973, pp.1-34.

(40) P.A. Allum, *Politics and Society in Post-war Naples*, Cambridge : Cambridge University Press, 1973, p.221.

(41) Jane C. Schneider and Peter T. Schneider, *Culture and Political Economy in Western Sicily*, New York : Academic Press, 1976, p.89.

(42) "furbo" の南部イタリア的含意は、「知るところを知った」有能な抜け目なさ、であり、悪い意味でない場合が多い。高名な人類学的政治学者のF・G・ベイリーは、イタリア南部の理想型リーダーを、"furbo" 的だと言っている（F.G. Bailey, "Losa," in F.G. Bailey(ed.), *Debate and Compromise : The Politics of Innovation*, Oxford : Basil Blackwell, 1973, p.183.）。

(43) J・ボワスヴァンも、シチリア人の基本的関心は、非人格的で敵対的な外界からの自分の家族の防衛であり、そのために有力な庇護者を求めると論じている（Jeremy Boissevain, "Patronage in Sicily," *Man*, Vol.1, No.1, 1966, pp.21-23.）。

(44) Luca Pinna, *La famiglia esclusiva*, Bari : Laterza, 1971.「変移主義」を馬場康雄は、簡潔に次のように説明する。「『変節する、変移する』(trasformarsi) という語に由来。原理・原則による対立よりも利害・打算による結合を選ぶ議会政治の技術を指す語として、現在のイタリアでも用いられている」（パオロ・ファルネーティ『危機と革新の政治学』東京大学出版会、一九八四年、二三一–二三二頁の訳注一二五・九）。詳しくは、Alfio Mastropaolo, "Trasformismo," in Gianfranco Pasquino (redattore), *Dizionario di politica*, Torino : Unione Tipografica-Editrice Torinese, 1976, pp.1051-1052.

(45) Lupo, "The Mafia," *op. cit.*, p.164. A・アンダーソンも、「一八六〇年から少なくとも一九五七年の間のシチリア・マフィアは、会員組織ではなく、文化・政治・法律の施行の自然的帰結である」(Annelise Anderson, "Organised Crime, Mafia and Government," in Fiorentini and Peltman(eds.), *The Economics of Organised Crime, op. cit.*, p.38.) と述べている。

(46) ルーポ『マフィアの歴史』前掲訳書、四一頁。

(47) Martin Clark, "How Organized is Organized Crime?," *Times Literary Supplement*, 1 September 1995, p.7. cited in Blok, *Honour and Violence, op. cit.*, p.273.

(48) アルラッキ『名誉を汚した男たち』前掲訳書、三頁。一九九二年から九三年にかけて一五万人を対象に行った、ミラノ社会学高等研究所の世論調査、『イタリア人におけるマフィアと腐敗』によれば、八二・八%が「汚職と暴力の組織的システム」というマフィア・イメージを持っていた。第二位が、「非合法的活動を行うシチリアや南部一般の一味・一家」で一〇・一%であり、最低は、「実際にはマフィアなんていない」の〇・四%であった(Ugo Pecchioli e Marco Marturano, *Mafia e corruzione : Un libro scritto da 150.000 italiani*, Miano : Franco Angeli, 1994, p.40)。

(49) Cf., J.Davis, "Morals and Backwardness," *Comparative Studies in Society and History*, Vol.12, 1970, pp.340-353 ; J.Davis, "Honour and Politics in Pisticci," *Proceedings of the Royal Anthropological Institute*, 1969, p.69.

(50) Anthony H. Galt, "Rethinking Patron-Client Relationships : The Real System and the Official System in Southern Italy," *Anthropological Quarterly*, Vol.47, No.2, April 1974, p.195.

(51) Anderson, "Organised Crime, Mafia and Government," *op. cit.*, p.45. Cf., Alberto Vannucci, "Istituzioni,costi di transazione e organizzazioni mafiose," *Polis*, XV, 3, dicembre 2001, pp.363-384.

(52) F.G. Friedmann, "The World of 'La Misera'," in Jack M. Potter, May N. Diaz and George M. Foster(eds.), *Pesant Society : A Reader*, Boston : Little, Brown & Company, 1967, p.330.

(53) スティル『シチリア・マフィア』前掲訳書、九六頁。

(54) アルラッキ『さらばコーザ・ノストラ』前掲訳書、一四二頁。

(55) Arlacchi, "Mafia : The Sicilian Cosa Nostra," *op. cit.*, pp.78-79.

(56) アルラッキ『さらばコーザ・ノストラ』前掲訳書、一四二頁。

(57) 同上、一三七頁。

(58) ファルコーネ『沈黙の掟』前掲訳書、九頁。

(59) Davis, "Morals and Backwardness," *op. cit.*, p.348.

(60) Davis, "Honour and Politics," *op. cit.*, p.69.

(61) アルラッキ『名誉を汚した男たち』前掲訳書、一四頁。

(62) Girolamo Lo Verso (a cura di), *La mafia dentro*, Milano : Franco Angeli, 1998, pp.54-55.

(63) ボッカ『地獄』前掲訳書、一一二頁。

(64) Gabriel A. Almond and Sidney Verba, *The Civic Culture : Political Attitudes and Democracy in Five Nations*, Princeton, NJ : Princeton University Press, 1963, p.402. 石川一雄ほか訳『現代市民の政治文化』勁草書房、三九八頁。Cf., Joseph LaPalombara, "Italy : Fragmentation, Isolation, and Alienation," in Lucian W. Pye and Sidney Verba (eds.), *Political Culture and Political Development*, Princeton, NJ : Princeton University Press, 1965, pp.282-329 ; Samuel H. Barnes and Giacomo Sani, "Mediterranean Political Culture and Italian Politics : An Interpretation," *British Journal of Political Science*, Vol.4, July 1974, pp.289-313. 同書に対しては、批判も多い。例えば、イタリア人が参加面で消極的である、との知見は、M・ドガンとD・ペラッシーによれば、次のように批判される。「イタリアの政党加入率がヨーロッパ随一であり、とりわけ、イタリアでは政治が至るところに浸透していると考えている者にとっては、腰が抜けるほどの驚きである。政治はこの半島では雇用全般に、公共住宅の割り当てに、農業補助金の配分に、そしてさらにはスポーツやレジャーに至るまで、つまり、ドン・カミロの小宇宙全体にまで深く浸透しているのである」(Mattei Dogan et Dominique Pelassy, *Sociologie politque comparative : Problèmes et perspectives*, Paris : Economica, 1982, p.72. 櫻井陽二訳『比較政治社会学』芦書房、一九八三年、八〇頁)。

(65) 拙稿「政治学を学ぶために」河田潤一編『現代政治学入門』ミネルヴァ書房、一九九二年、八頁。

(66) Johan Galtung, *Members of Two Worlds : A Development Study of Three Villages in Western Sicily*, New York, Columbia University Press, 1971, p.63.Cf., George M. Foster, "Peasant Society and the Image of Limited Goods," *American Anthropologist*, Vol.67, 1965, p.312.

(67) Simona Piattoni, "Virtuous Clientelism' : The Southern Question Resolved?," in Jane Schneider(ed.), *Italy's "Southern Question" : Orientalism in One Country*, Oxford : Berg, 1998, p.229.

(68) Robert D. Putnam, *Making Democracy Work : Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, NJ : Princeton University Press, 1993, Chapter 6. 拙訳『哲学する民主主義』NTT出版、二〇〇一年、第六章「社会資本と制度の成功」を参照。パットナムの「社会資本」論については、概念の重要性、拡張性に鑑みて、様々な批判が寄せられてきた。トクヴィル的視座(慣習が実践・構造を規定する)、社会資本や市民的伝統の測定(調査手法、データの質、分析方法、

統計的手法)、政治作用を軽視する文化主義等、数え上げれば切がない。ここでは、"Special Section : Ctitique of Robert Putnam's *Making Democracy Work*," *Politics & Society*, Vol.24, No.3, March 1996 のみを挙げておこう。また、同書に対しては、南北二元論の再来だとの批判も多い(Cf., Salvatore Lupo, "The Changing Mezzogiorno : Between Representations and Reality," in Stephen Gundle and Simon Parker(eds.), *The New Italian Republic*, London : Routledge, 1996, p.248.)

(69) Putnam, *Making Democracy Work*, *ibid*., p.148. 前掲訳書、一八一頁。

(70) Gambetta, "Mafia : the Price of Distrust," *op. cit*., p.158.

(71) Robert D. Putnam, "The Prosperous Community : Social Capital and Public Affairs," *The American Prospect*, No.13, Spring 1993, pp.32-42. 拙訳「社会資本と公的生活」河田潤一・荒木義修編『ハンドブック政治心理学』北樹出版、二〇〇三年、第一六章。

(72) 外集団との協働を促進する「架橋的(bridging)」社会資本との対比については、Robert D. Putnam, *Bowling Alone : The Collapse and Renewal of American Community*, New York : Simon & Schuster, 2000, Chapter 1 を参照されたい。パットナムは、同書で多元社会アメリカにおける自発的結社の衰退を指摘し、民主主義の条件に関するトクヴィル的認識を提示するとともに、社会資本に「架橋的」と「結束的」の二つの型を提起し、後者は市民社会にとって逆機能的であるとの認識を示した。

(73) Donatella della Porta, "Social Capital, Beliefs in Government, and Political Corruption," in Susan Pharr and Robert D. Putnam(eds.), *Disaffected Democracies : What's Troubling the Trilateral Countries?*, Princeton, NJ ; Princeton University Press, 2000, p.205.

(74) *Ibid*., p.227.

(75) Leoluca Orlando, *Fighting the Mafia and Renewing Sicilian Culture*, San Francisco : Encounter Books, 2001, p.1. Cf., Sergio Buonadonna (a cura di), *Orlando, Un uomo contro : Il sindaco antimafia*, Genove : De Ferrari Editore, 1999.

(76) Umberto Santino, *Storia del movimento antimafia*, Roma : Editori Riunitim, 2000, pp.252-256. Cf., Michele

Pantaleone, *Mafia e antimafia*, Napoli : Tullio Pironti Editore, 1992.

(77) Arlacchi, "Mafia : The Sicilian Cosa Nostra," *op. cit*., p.90. Cf., Jean-Louis Briquet, "Organized Crime,Politics and the Judiciary in Post-war Italy," in Felia Allum and Renate Siebert(eds.), *Organized Crime and the Challenge to Democracy*, London : Routledge, 2003, Chapter 11.

(78) Commissione Parlamentare Antimafia, *Relazioni della XI legislatura, op. cit*., p.59. cited in Jamieson, *The Antimafia, op. cit*., p.55.

(79) アヤーラ『マフィアとの死闘』前掲訳書、二四三頁。

［付記］ 本稿は、平成一四・一五年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「政治腐敗・クライエンテリズムに関する比較政治学的研究」（研究代表者・河田潤一）の成果の一部である。